【土木計画学研究・講演集　No.20(2)　1997年11月】

ワーキングマザーの交通特性に関する研究

Transportation Characteristics of Working Woman Who Has Children

八木　麻未子**　佐藤　馨一***
by Mamiko YAGI, Keiichi SATOH

1．研究の背景および問題意識

女性に関するあらゆるデータは日々激変している。女性の自動車免許保有数の増加とともに、図 1 に示すように、自動車の利用も増加している。

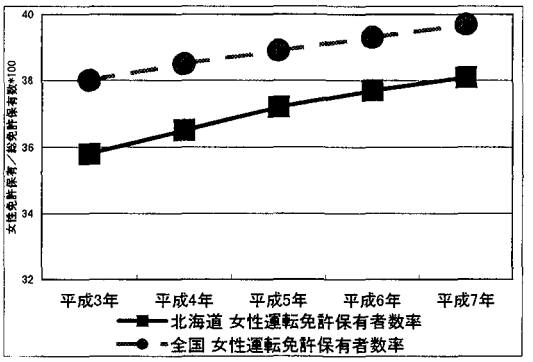

図1．女性の運転免許保有率の推移

今や働く女性は珍しい存在でなくなり、既婚女性の過半数は働いている。社会的にも、女性の労働力を必要とし、年々働く女性の数は増加傾向にあり、働く母親、ワーキングマザーが増加してきている。

しかし、今までワーキングマザーの交通問題に関する研究、調査事例がほとんどないのが実状である。従来のパーソントリップ調査では、一般的な通勤交通の特性が分析され、女性の通勤問題を主とした調査分析事例が無く、特にワーキングマザーの交通実態に関する調査報告はない。本研究では、この点に問題意識を持ち、今後ますます増加傾向にあるワーキングマザーの交通問題を取り上げて、その解決に向けて取り組むものである。

2．ワーキングマザーの定義

本研究では、「ワーキングマザー」を、「乳幼児および児童を持ちながら仕事に従事している母親」と定義する。働き方は、フルタイム、パートタイムのいずれでもよい。ワーキングマザーを取り巻く社会的背景、家庭内での背景を整理すると以下のようになる。

【社会的背景】

働く既婚女性は、DINKS (Double Income No KidS)，「子供を作らない共働きカップル」、または、DEWKS (Double Employed With KidS)，「子供を持つ共働きカップル」というﾗｲﾌｽﾀｲﾙのどちらか選択することになり、最近では後者のﾗｲﾌｽﾀｲﾙがより支援されつつある。女性のﾗｲﾌｽﾀｲﾙが多様化してきた今日で、未婚でも子供は欲しいという考えも浮上してきた。

女性が結婚後働く理由は、どちらか一方(大半の場合、夫側)の収入だけで生活するのが困難、またはぎりぎりの場合が多く、生活のため、生活にゆとりを与えるために女性が働く場合が多い。結婚後の「必要」からでなく個人の生き方として働く選択をする場合も多い。また、離婚が昔ほどタブー視されなくなってきているため、母子家庭、または父子家庭が増加の傾向にある。女性が子供を産んでからも社会に出て働くという生活様式が一般化してきた。女性も終身雇用の元で働くならば、働き始める年齢から考えて、未婚の期間よりも、既婚の期間の方が多く、子供を設けてからの期間が多いのも言うまでもない。

【家庭内での背景】

働く女性の家庭内での労働については、女性の社会進出ほどはパートナー(夫)の充分な家事分担の習慣が浸透していないため、フルタイムはもちろん、パートで働く女性の上に主婦労働という負担ががまるまるプラスされているという一人二役を担っている場合が多い。そして、その過重労働の一番の手伝い手は、子供、または両親なのである。

実際、妻が仕事をする際に「家のことをちゃんとす

*キーワード：ワーキングマザー、DEWKS、労働軽減、社会進出
**学生員　修(工)　北海道大学大学院工学研究科都市環境工学専攻
(札幌市北区北 13 条西 8 丁目、tel&fax 011-706-6216)
***ﾌｪﾛｰ　工博　北海道大学大学院工学研究科都市環境工学専攻
(札幌市北区北 13 条西 8 丁目、tel 011-706-6209,fax 011-706-2296)

るなら」という条件付きで OK する場合が多く、最低条件の家事能力も持ち合わせていなく、しかもその事をマイナスと自覚してない夫たちが多い。家事だけでなく、育児、さらにこれからは老人介護までが総て女性の労働として、しかも無償で当たり前のようにのしかかっているのが現状である。

ワーキングマザーにとって車とは、子供の保育所への送迎、日々の買い物、レジャー等、自動車の利用が子供を持つ女性、特にワーキングマザーの生活環境において不可欠であり、「自動車が自由に使用できていなければワーキングマザーではいられない」という存在になっている。自動車を利用したくとも、子供を持つことによる経済的負担の上に、1 台目、または 2 台目の自動車の購入費、駐車場代、維持費がのしかかる。また、勤務場所に駐車場の確保が困難な場合が多い。

現在、多くの母親が自転車に子供を一人、二人乗せ、なおかつ買い物袋をたくさん抱えて曲芸のような乗り方をしている光景をよく目にすることがある。これは、一部の条例で禁止しているところもあり、危険であるだけでなく、北海道の冬期間、本州の梅雨期間は自転車は使用できない。「子供は持ちたいが、経済的に苦しくなる、そこで働きにでると育児、主婦業を同時にこなさなければならなく、労働負担はより過重になる」というジレンマを抱えている女性は多い。

3. 道央都市圏における女性の交通特性

女性に関する第 1 回から 3 回までの道央都市圏パーソントリップ調査結果を示す。図 2 に女性の免許保有者の推移を示す。女性の免許保有者は急増している。第 3 回調査結果では、15 歳以上の女性の約 5 人に 1 人が免許を保有している。

自動車でのトリップ数を図 3 に示す。自動車でのトリップ数を見てもその数字は増加している。約 20 年前の第 1 回目の調査と比較すると、女性の自動車でのトリップ数は約 14 倍に増加しており、人口の伸びの 8 倍に達している。図 4 に第 3 回目の調査の、自動車を利用して移動した女性を年代別に示した。いわゆる「子育て世代」の 30, 40 歳代の女性がもっとも多く、職業では「専業主婦」がそれぞれほぼ半数であった。このことから、育児をする女性にとって自動車の利用が必要であるかが伺える。

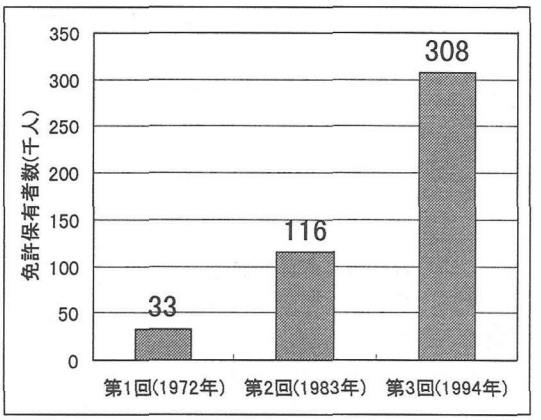

図2. 女性の自動車免許保有者数の推移

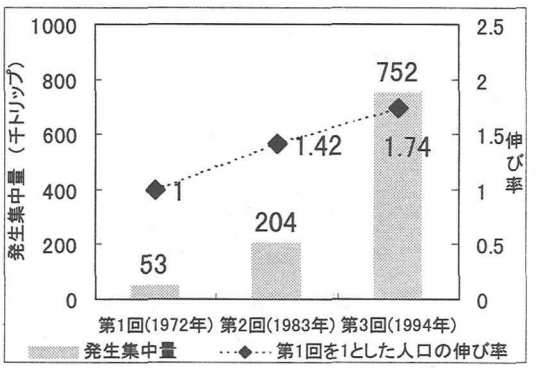

図3. 女性の自動車でのトリップ数
人口の伸び率

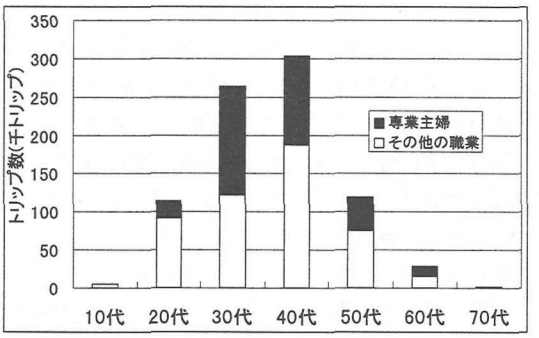

図4. 年代別　女性の自動車でのトリップ数

参考文献

1) (株) 日本ﾘｻｰﾁｾﾝﾀｰ　ﾜｰｷﾝｸﾞﾏｻﾞｰ研究会：ﾜｰｷﾝｸﾞﾏｻﾞｰのススメ、(株) ぎょうせい、1992. 11
2) 井上　實：おもしろ男女共生の社会学、学文社、1994. 4
3) 総理府：婦人白書、女性白書、国民生活白書、大蔵省印刷局、平成 5 年度版、平成 6 年度版、平成 7 年度版
4) 北海道開発局・北海道・札幌市：札幌市を中心とした道央都市圏の人の動き～第 3 回道央都市圏パーソントリップ調査から～、1995
5) 交通安全録書：北海道、平成 8 年度版